



チャイナタウンとしての南京町の戦略 : 南京町商店街振興組合に注目して

宋, 晨陽

(Citation)

海港都市研究, 10:65-82

(Issue Date)

2015-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009037>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009037>



チャイナタウンとしての南京町の戦略

——南京町商店街振興組合に注目して——

宋 晨 陽
(SONG, Chen Yang)

はじめに

日本社会は多文化社会への道を着実に歩んでいる。当然、日本で生活する中国系出身者（中国国籍を保持する「華僑」、日本籍を取得した「華人」）も多文化社会を構成する重要な一員である。神戸港開港以来、日本の中国人とその団体は徐々に増加し、開港地を中心に特色ある地域社会を形成してきた。彼らの動きが最も顕著に表現されるのは中華街である。長崎、横浜、神戸にある三つの中華街は多くの日本人や外国人に知られている。本論では特に神戸の中華街である南京町に注目して考察を行った。

まず、本論に関わるいくつかの概念について説明しておきたい。中国国籍を保持する「華僑」には二つのイメージが存在しているように思う。一つは中国から海外へ出て行き、重労働に耐えて生活する貧しい中国人である。彼らは同じ中国の中でも同郷出身者同士の結び付きが強く、助け合いの精神に富んでいるというイメージ¹。もう一つのイメージは中国国籍を持ったまま居住国で永住を決めた人たちとその子孫。前者と異なり、成功者のイメージがつきまとう²。「華人」とは居住国の国籍を持ち、その国の国民として帰化した中国系とその子孫たちである。「老華僑」は従来から他国にいる華僑で、その世代もその国で生まれ、華僑 2 世、3 世などと呼ばれている。「新華僑」は 1980 年代以後に中国から海外へ行った人。特に留学生出身者が多く、中国で高等教育を身に着けた後に海外へ進出した人たちである。日本にいる新華僑は IT、金融、学術研究など先端分野の職業につくか、もしくは、日本の大企業に就職して中日経済交渉の最前線で活躍する人が少なくない。一方、語学留学や華僑の親戚を頼って来日した者もある³。現在の神戸南京町には華人や、老華僑と新華僑、日本人が入り混じっている。新華僑も二代目が成人する昨今、老華僑と新華僑の間にははっきりした境界線を引くことが困難になっている。

ところで、近年横浜中華街と神戸南京町を比較研究する研究者が増えている。ここでは、両中華街の相違点を簡単にまとめておきたい。まず、形成時期が異なる。南京町の形成は横浜中華街より 20 年程遅い。1859 年の横浜開港後、多くの中国人が来日し、1868 年頃に横浜中華街が形成されたと言われる。神戸は 1868 年に開港し、1888 年頃までに南京町が形

¹ 譚璐美、劉傑『老華僑 新華僑—変容する日本の中国人社会』文藝春秋、2008 年版、3 頁。

² 中華会館編『落地生根—神戸華僑と神戸中華会館の百年』研文出版、2000 年版、2 頁。

³ 莫邦富『新華僑』中公文庫、2000 年、13～18 頁。

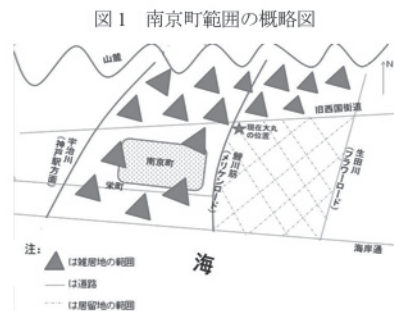
成された⁴。第二に、住む場所が異なる。横浜の中国人は限定された居留地の中で集まって住んでいた。神戸の華僑・華人は居留地外の雑居地に住んでいた。第三、規模が異なる。2000年現在の中華街内部の店舗数は横浜は500軒、南京町は200軒である。中華街の組織に加入している人数は横浜が340人、南京町が89人である⁵。全体的に見ると、横浜に比べて神戸南京町の範囲は小さく、店舗数は少なく、発展のスタートは遅いが、歴史の沿革、現在の街の機能や役割は非常に共通している。商店街の組合組織が集客を目的として中国の祭祀にちなんだイベントを開催し、中国の文化伝統を復興させ、アイデンティティの強化に注目しているのは両者の共通点である。

しかし、横浜中華街は伝統的な中国社会に見られる閉鎖性が高いと見られ、春節祭などの伝統な祭りのみならず、祖国の建国記念日などにもイベントを行い、中国や台湾の政治と関わりが密接である。一方、南京町にはこのような政治性は全くない。また、横浜は組織の中の日本人は多くないが、南京町では日本人の方が逆にやや多い。この二点は大きな違いであり、南京町は日本人社会との繋がりが深いという特徴があると言える。自らのアイデンティティを保持しながら、新たな南京町らしい伝統を創出し、さらに地域「共生」のために、日本人との共存共栄を実践している。

本論では神戸南京町に着目し、南京町の歴史や南京町商店街組織とその発展の経緯と明確にし、新しい伝統の創出を中心に、特に春節祭の各種データからこれらの特徴について分析を行った。また、90年代以来、インターネットが発達し、南京町も商店街公式ホームページを立ち上げ、ネットによる宣伝や集客を実践している。本論の後半では『南京町通信』⁶を利用するうえで、南京町の公式ホームページはどのような役割を果たしているのか、また、どのような人たちがどの程度、それを利用しているかを確認した上で、南京町公式ホームページの活性化に関して、どのような新しい展開が可能であるかも検討を行った。

第一章 南京町の形成と発展

神戸の中国人社会は1868年の神戸開港による外国人の来往を契機として形成された。神戸にやって来たアメリカ、イギリス、フランス、オランダ、ロシア人たちは、日本と祖国が条約を結んで、設定された外国人居留地（東は現在のフラワーロードのひ



2013年12月に作成。

⁴ 南京町の文献の上の初出は1888年11月6日の『神戸又新日報』である。(同注2、55頁)。

⁵ 池田和子「横浜中華街と神戸南京町：東西チャイナタウン比較への試み」『地域と社会』第五号、2002年版、123～152頁。

⁶ 南京町の組織である南京町商店街振興組合員の内部資料、神戸華僑歴史博物館に保存している。

と筋西、西は鯉川筋、北は旧西国街道、南は海岸線まで、合計 126 区画からなった⁷に住み、その中で営業活動を始めた。清国からやってきた中国人たちは、当初清国政府と日本の間に条約が締結されていなかったため、条約国民ではなく、一部の使用人を除いて外国人居留地内に住むことができなかった。そこで、居留地周辺の外国人に居住が認められていた（制限的）「雑居地」に住むようになった。雑居地は居留地を囲むように設定されており、東は生田川（現在のフラワーロード）、西は宇治川（現在の神戸駅約東 300mを流れる）、北は山麓までの範囲に設定された。中国人は雑居地の中でも居留地のすぐ西、かつ海に近い、現在の海岸通や栄町通あたりに住むようになった。開港の年、神戸に來た中国人は 10 数人だったという⁸。さらに数ヶ月で 240 人に上ったといわれる⁹。

中国人がこの雑居地を選んだ理由は、彼らの職業と関係がある。すでに開港していた長崎から神戸に移動してきた者も含めて、神戸に來た中国人の中には貿易商や買弁が多かった。輸出入に使われる外国の船会社は港近くの居留地にあり、外国為替銀行も居留地にあったので、必然的に居留地や港に近い場所に住むようになった。また、欧米人家庭の使用人や船員として日本に來た中国人も多かった。その理由は、開港当初やって來た欧米人はニューヨークやロンドンから直接日本に來たのではなく、先に中国や香港に進出した際に中国人を雇用したことに求められる。料理や理髪、仕立などの生活面のサービスは中国人の得意とするところで、多くの欧米人が中国人を連れて日本にやって來た。

1871 年には清朝政府と明治政府の間に日清修好条約が締結され、中国人の法的な地位も認められた。そして、単身赴任で來ていた中国人の多くが、家族を呼び寄せるようになった。こうして中国人人口が急増し、生活の必要を満たすための「市場」が居留地に隣接したところに誕生した。当時は、東西約 160 メートル、南北約 80 メートルの狭い町の中に、居留地やその周辺の外国人や貿易業者を相手にした雑貨店、豚肉店、漢方薬店、生鮮食料店など各種の店舗が軒を並べ、その他に洋服職人や様々な職人たちが雑居するようになった。これが、現在の「南京町」の最初の様子であった。1879 年の神戸居留清国人は 617 名という¹⁰。1893 年には約 1060 人となった¹¹。

「南京町」という名前を付けたのは、江戸時代の長崎貿易に従事した中国人の多くが南京周辺の長江中下流域出身であったからだという説がある。昔は長崎の中華街や横浜の中華街も日本人から「南京町」と呼ばれた。もともと親しみを込めた表現だったのだが、戦争中に差別的な使われ方をしたこともあり、華人には嫌う人も多い。横浜では、1955 年に「チャイナタウン」の訳語として「中華街」を街の名とした。長崎は「長崎新地中華街」

⁷ 可児弘明、斯波義信、游仲勲『華僑・華人事典』弘文堂、2002 年、263 頁。

⁸ 神戸華僑華人研究会『神戸と華僑（この 150 年の歩み）』のじぎく文庫、2004 年版、1 頁。

⁹ 『兵庫県大百科事典』（下巻）、神戸新聞出版センター、1983 年、382 頁。

¹⁰ 開港 30 年記念会編『神戸開港三十年史』（下巻）、顧房、1974 年、757 頁。

¹¹ 張玉玲「観光地「中華街」の形成と発展からみる日本人と華僑が試みた「共生」」『愛知淑徳大学論集』第 7 号、2007 年、170 頁。

1899年に外国人居留地が廃止され、外国人の内地雑居が認められるようになり、港は一層発展した。元々「南京町」は、第二次世界大戦まで日本人や中国人が店舗を構え、にぎやかな市場として近畿地域では広く知られていた。1935年前後までに、世界各国からの珍品が揃い、国際的な市場となっていた¹³。

[illegible]

1937年に日中戦争が勃発すると、物資統制が始まった。1941年には太平洋戦争に突入し、物流は途絶えた。日本全国同様であったが、南京町も店はあっても商品がない時期を経験した。1945年3月の神戸大空襲では、南京町はほぼ全焼し、誰もが貧しく、商売にならなかった。神戸の街の中心地帯は約8割が焼失した。しかも在留中国人が最も多く住んでいた海岸通・元町通・トアロード筋西側一帯は完全に焼失し、あたり一面焼野原となった¹⁵。この8年間の日中戦争の時期に、多くの華僑は神戸から離れた。他地域へ転出した者や帰国した者、一家で避難した者もいる。

第二次世界大戦後、1950年に朝鮮戦争が勃発すると、神戸や横浜などの港湾都市は輸
物資の集積地となり、外国船が集まるようになった。そして、アメリカ兵や外国人船員た

¹⁵ 『神戸市史』神戸市文書館、1965年第三集行政の第18章外事の第3節「在留中国人」、1170頁。

ちが神戸港に船が留まっている間に、港に近い南京町へ行き、酒を飲むなど、南京町は憂さ晴らしの場となった。ここにはいわゆる「外人バー」が乱立するようになった。南京町は普通の住民が近づけない、危ない場所と見られるようになった。このような様子が 1965 年頃まで続いたという¹⁶。

一方、1900 年頃から華僑と日本人の間で、南京町の発展のための新しい動きが始まった。この時期に二つの組織が登場した。一つは商売の発展と相互扶助のために、華僑を含めた外国人商人たちが結成した組合であった。もう一つは露店を経営する日本人たちの組合であった。そして 1926 年に、南京町 50 周年記念を催す、所轄三宮警察署からの勧誘があり、両組合を合併した「南京町市場組合」が結成された¹⁷。

1965 年頃、「南京町市場組合」には 65 店舗が加入していたが、その業種は料理店 8 軒、海産物店を含む食料品店 12 軒、肉店 6 軒、残りは魚店、青果物店などであった。そのうち、華僑と見られる店主は 23 名で、残りは日本人である。日本人経営の店のほとんどは中国物産とは無関係であった¹⁸。

1970 年頃から、この町を復興させようとする人たちが、何回も市当局へ足を運んだが、十分な合意が得られず復興計画は中断した。しかし、1972 年の中日国交回復を契機に、中国に対する人々の関心が高まっていった。神戸は国際都市として南京町を含めた都市景観建設を進めることとなる。異人館を目玉として北野地区の観光地整備に乗り出し、観光が神戸における都市計画政策の新たな方向性として位置付けられた。南京町も市当局の景観作り事業の一環として、「国際港町神戸」にふさわしいものにする方向、つまり中国的な景観や意匠に富んだ街作りをバックアップするという方針を神戸市が打ち出した。

区画整理実施の手始めとして、1977 年 2 月に、地元関係者たちによる「南京町を考える会」ができた。この組織は、南京町復興に最も重要なのは地元が団結して復興へ努力することであると確認した。さらに神戸市からの援助を受け、中華門の建立が計画された。市からの援助を受け入れるため、南京町自体正式な法人組織化が必要と認識され、1977 年 7 月に、南京町の商店主約 60 人により、「南京町商店街振興組合」が結成された。これ以降、南京町は本格的に発展し始めたのである。

1981 年に、「南京町復興環境整備事業実施計画」が始まった。当初の範囲から西側に（現在の西安門）向かって領域を広げ、東西は 200 メートル、南北 110 メートルとおおよそ倍に拡大された。1982 年 1 月 6 日の神戸新聞記事「よみがえるチャイナタウン—南京町復興今月に着工」は、「10 月に完成すると、15 店舗を増加し、中華料理 10 店、中国物産店 35 店など、計 75 店となり、中華街らしい賑わいが復活する」と報じている。さらに、1985

¹⁶ 「南京町の歴史（「神戸華僑歴史博物館」の館長・藍璞へのインタビューにより）」

『Highway』、2007 年、第 169 号、3～4 頁。

¹⁷ 鴻山俊雄『神戸大阪の華僑—在日華僑百年史』華僑問題研究所、1979 年、170 頁。

¹⁸ 同注 17、167 頁。

年までに南楼門、南京町広場の東屋、長安門と中華街らしいシンボルも次々と完成した。また、1987年から「春節祭」のイベントが始まり、観光地として大きな一歩を踏み出した。翌1988年に、南京町北口に一对の中国獅子像（大理石製）を設置し、1989年に南京町広場に12支の石像を設置した。さらに1990年、南京町は神戸市都市景観条例に基づく景観形成地域の指定を受けた。1993年に南京町会館「臥龍殿」が竣工した。その一階は市民トイレで、二階には各文化教育室を開くコミュニティーホール、三階に振興組合の事務室が設置されている。現在二人の日本人社員が勤務している。南京町の活性化に向け、振興組合は様々な活動を展開してきた。

しかし、町づくりが順調に進む中、1995年1月17日の阪神・淡路大震災が南京町に大きな衝撃を与えた。震災が起こったのは春節祭の前だったので、イベントを中止せざるを得なかったが、商店主たちは早くも1月25日頃から屋台を出して、暖かいスープや餃子などを被災者に無料で提供し、大変喜ばれた。これを契機に、屋台で営業する形が定着し、若い人たちが気軽に集える南京町の新しいイメージが形成された。

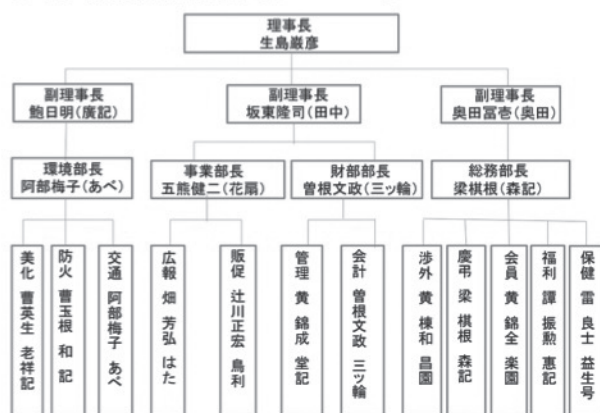
また、1996年12月11日には「第一回南京町ランターンフェア」を神戸ルミナリエに併せて開催した。中国提灯が町中を彩り、暖かな光で装飾された。1997年には、「南京町」を当組合の商標として登録した。さらに、「春節祭」が神戸地域無形民俗文化財に指定された。1998年10月頃に「中秋節」を企画するようになり、毎年実施している。2005年には「西安門」が阪神大震災からの10年を機に復興のシンボルとして竣工した。2006年以降には、毎年3月頃に「興隆春風祭」を開催している¹⁹。こうして現在は年間通じて多くの観光客で賑わう南京町となっている。

第二章 南京町商店街振興組合と中国伝統活動

図3は、1986年から1988年までの各理事の役割分担表である。理事長一名、副理事長三名という構成である。それぞれの下には環境部長、事業部長、財務部長、総務部長がいる。部長の下に、さらに役割が細分化されている。現在（2013年）の南京町商店街振興組合理事長である曹英生²⁰は1986年の時、環境部長の下で美化を担当していたことがわかる。

各部の分担と活動内容のうち、事業部は、市所有の遊休地の活用、助成金の申請など、

図3 南京町商店街振興組合役員分担表(1986—1988年)



¹⁹ 南京町公式ガイドブック『南京町』2013年版「南京町の歴史」第6頁。

²⁰ 南京町「老祥記」社長。

財務部と共同して事業を企画している。広報は、月1回広報誌『南京町通信』の発行と販売促進（特に春節祭などのイベントの実行）を実施している。総務部の下、保健担当は公衆便所、ゴミ箱の設置、定期的な害虫駆除などを管轄し、福利担当は、年1、2回の組合員旅行、周辺地区との親睦会の実施を担っている。環境担当は、不法駐車、道路の占拠問題の解決、花壇の設置、各店舗の消火器の設置などを管轄している。

振興組合の設立に当たっては、当時の中華総商会会長陳徳仁や、南京町の地元の関係者として、それぞれ初代、二代目の理事長であった日本人の辻川正宏、生島厳彦が中心的役割を果たした。役員は20名前後で、組合員の間では選挙も行うが、実際には役員による自薦、他薦の形によって選ばれている。1977年当初の組合員は67人で、日本人と華僑の割合は基本的に半々であったが、日本人の人数がやや多かった。華僑の組合員には、大陸と台湾の両方の出身者が含まれている。

また、1986年当初の組織方針としては、共同販売、共同購買、共同保管事業を行い、組合員への金融、福利、指導、労働対策、環境整備事業などが挙げられている。なかでも、環境整備を重視し、南京町の独特の雰囲気を構築するために努力している。具体的には、①メイン道路の歩行者専用道化。車輛の通行規制を行うと同時に道路を特色ある買い物プロムナードとする。②街路灯や植樹の設置。個性と潤いのある道路とする。③広場の設置（307m²）と中国的デザインを有する新築建物への景観形成のための助成（景観条例に基づいて景観形成地区の指定を受け、既存建造物の中国風化のための改修等についての助成を受けることができた）。④楼門の建設²¹などである。

南京町は観光地として神戸の重要な異文化地域と認められ、毎年世界各地や日本各地から多くの観光客や地元の人たちが訪れている。この一番の魅力はやはり中国文化を伝える伝統的なイベントである。普段は、中華料理を食べに来る客と中華雑貨を買いに来る客、中国風の雰囲気を感じるために来る客などが多いが、「春節祭」と「秋節祭」など中国の伝統的な祭りの頃に来て、中国の龍舞、獅子舞等を見て楽しんでいる客も大勢いる。

「春節祭」は中国の旧暦の1月1日に行われる。「春節」は中国人にとって、日本人のお正月のように年中行事の中で最も大切な伝統的なものである。「龍舞」は中国漢民族の民間舞踊で、最初は神を奉るための踊りであったが、民間芸能として徐々に中国全国に広がった。「龍」は中国古代神話の中で神聖な動物として崇められる。春節祭に龍舞を行うのは豊作を祝い万事順調を



『関西華僑報』1987年3月5日第172号

²¹ 南京町商店街振興組合『南京町通信』1986年10月創刊号、5～21頁。中心楼門建設価格は1535万円。そのうち、組合員自己資金35万円、制度融資1000万円、助成金500万円であった。

祈る意味もある²²。

「第一回神戸南京町春節祭」は1987年に開催された。主要な目的は、地域のチャイナタウンとしての知名度を高め、観光地として宣伝することであった。開催に当たっては、南京町商店街振興組合の青年部²³が中心となって計画し、街路の装飾、中国物産や食品を販売する露店の出店、獅子舞や龍舞の披露などを行った。さらに、1987年1月9日の『神戸新聞』の「中国の旧正月再現」に春節祭のことが掲載され、3月5日の『関西華僑報』にも「南京町の「春節祭」」が掲載され、それ以降他の新聞やテレビ局もこのような報道を数多く行った²⁴。

獅子舞は神戸華僑総会舞獅隊のメンバーによって行われた。その演技は、彼らが中国や日本の長崎の龍舞をビデオなどを通じて研究し、それらを参考に作り上げたものであった。演技に使われた40メートルの長さを誇る龍は、香港に特別注文して取り寄せられた。第一回の「春節祭」の後、地元では龍舞を行う「舞龍隊」、獅子舞を行う「吼獅堂」のそれぞれが正式に組織され、毎年の「春節祭」やそのほかの南京町の諸行事に参加し、神戸以外の地域からも様々な行事に招待されるようになった。また、神戸華僑幼稚園の子供たちは、民族教育の一環として獅子舞を習い、イベントへも参加することがあった。

その他にも、神戸中華同文学校の生徒たちによる中国民族舞踊が披露されている。さらに、1990年には、中国広東省から雑技団が招聘され、南京町の「春節祭」に参加した。それ以後も、台湾、上海、天津から雑技団や京劇団が呼ばれて「春節祭」に参加した。さらに毎年約30万人の観光客を動員し、神戸南京町の知名度は一挙に上がるようになった。そこには、南京町商店街振興組合の日本人メンバーの人脈経験のみならず、中国系メンバーのネットワークも生かされていた。

1997年、「神戸南京町春節祭」は神戸市から「地域無形民俗文化財」の指定を受けた。知名度向上のイベントとして開始された「春節祭」はさらに南京町のアイデンティティの重要な核となり、特徴を持って新しく作られた「伝統」となった。現在、この伝統的なイベントの開催は単なる祭り、あるいは観光客を集める方法ではなく、南京町の再興に伴った、中華民族文化再興の動きとも考えられるのである²⁵。

2013年2月に、第25回の「春節祭」が9日間にわたって開催された。毎日のイベント内容は基本的に龍舞、獅子舞、中国の歌や太極拳などである。さらに、中国の元日に特別

²² 高橋正明、于亜「神戸南京町の形成と変容」『大手前女子大学論集』1996年第30号、116頁。

²³ 京都精華大学文学部「神戸の南京町—歴史と発展の様子」『国内フィールドワーク報告書第1集』第1、2章、1993年版、29頁。青年部組合員へのインタビューによると、イベントを行うために約40名の振興組合員から若々しいというイメージを与える目的として結成した。

²⁴ 南京町商店街振興組合『南京町通信』1987年版、15～30頁。

²⁵ 大橋健一「神戸南京町の再構築と観光」『立教大学観光学部紀要』第2号、2000年3月、38頁。

な「中国史人游行」や「南龍游行」などのパレードが行われ、その行程は神戸三宮センター街から大丸北側へ、そして元町商店街に、最後に南京町に到着するというものであった。游行の時間内には南京町では舞踊や歌などが同時に行われた。朝 10 時の神事(獅子開眼式)が終わった後に、11 時から夜の 19 時までこのようなイベントを間断なく行ったのである。担当団体のうち、獅子舞は神戸華僑総会舞獅隊と南京町龍舞団が交替して行った。太極拳は神戸華僑総会太極拳協会と兵庫太極拳同好会が、舞踊は神戸中華同文学学校民族舞蹈部と神戸華僑総会華芸民間舞蹈部が、龍舞・獅子舞はシンガポールから招請した J B C C²⁶が、音楽は神戸華僑総会民族楽団華薈が中心となり、それぞれ担当した²⁷。

春節祭は南京町商店街振興組合にとって最も重要なイベントであり、各協力団体からの支援を獲得し、さらに日本人団体も協力している。神戸華僑総会と神戸同文学学校の生徒からの支援は大きく、華僑同士の支援がなければ成功させられなかったと思われる。

「中秋節」は中国旧暦の 8 月 15 日の夜に、月を愛で、秋の収穫を祝って地の神を祀る節句である。この時期の満月は一年で最も円に近く、美しい。この日に家族全員が円形の食卓で、円形の食器で食事をして家族団らんを楽しむ。さらに食事後に、「月餅」(小麦粉から作った月の形の点心)を作って、家族に食べてもらったり、友人に送ったりする。現在では家族全員が揃い、月のように「円満」でありたいという意味が中心になっている。1998 年に南京町で初めて「中秋節」が開催された。翌年から春節祭と同様、毎年行うようになった。2013 年現在、第 16 回中秋節が開催され、イベントは龍舞、獅子舞、中国の歌や太極拳などを基本に行っているが、中秋品茶会と祭壇参拝という演目に加えられた。さらに中秋湯圓(タンユェン)の手作り体験もできるようになっている。

「端午節」は中国旧暦の 5 月 5 日で、中国の有名な詩人屈原²⁸を記念するためのものである。急に暑くなるこの時期は、昔から病気にかかりやすく、亡くなる人が多かったようで、その為に 5 月を「毒月」と呼び、厄除け・毒除けをする意味で菖蒲やヨモギ・ガジュマルの葉を門に刺し、薬用酒や肉粽を飲食して健康増進を祈願する。2013 年現在で、南京町の端午節は第 3 回目、チマキを作る体験ができるようになった。イベントの規模は小さく、中国人歌手が広場で中国曲を歌う程度である。

1996 年 12 月から「ランターンフェア」という東洋の光の祭りが「神戸ルミナリエ」の開催前日からクリスマス頃まで開催されている。中国の伝統的なイルミネーションイベン

²⁶ 2009 年に上海で開催された龍舞の世界大会で優勝している団体・新加坡惹蘭勿利民衆俱樂部龍獅團(JBCC)。

²⁷ 2013 年南京町春節祭のパフレットを参考にした。

²⁸ 戦国時代後期に生まれた屈原は、才能溢れた詩人だったが、周りに讒言され、楚の懷王に疎まれて五月五日に汨羅に身を投じた。楚国民達は、小舟で川に行き、太鼓を打ってその音で魚をおどし、さらにちまきを投げて、「屈原」の死体を魚が食べないようにした。その日が中国の年中行事になり、へさきに竜の首飾りをつけた竜船が競争する行事「ドラゴンレース(龍舟比賽)」が生まれたという(出典:『世界大百科事典』第二版、平凡社、2006 年、1512 頁)。

トである「灯節」を体現し、獅子舞も行われている。現在、「ランターンフェア」が南京町の冬の風物詩として定着している。メインストリートを中心に、緑色の中国提灯がずらりと並び、南京町広場にあるあづまやをスポット装飾して、ルミナリエやクリスマス装飾とは一味違う中国的な演出がなされている。

2006年から、毎年3月頃に南京町で「興隆春風祭」が開催されている。もともとは神戸空港開港1周年を祝ってスタートしたイベントで、2013年現在では第7回目が開催された。「南京町」を訪れる人々との出会いに感謝し、ともに春の一日を楽しく過ごそうとの目的がある。早春3月の日祝日（毎年5日間程度）に中国の伝統芸能を披露している。厳しい冬の寒さもゆelmi、春の息吹が感じられる3月に行われる、異国情緒豊かな神戸の中でもとりわけエキゾチックな町「南京町」でのイベントである。特に近年から神戸市社会福祉協議会を通じて、被災地の復旧・復興に役立てるため、興隆春風祭期間に募金活動が行われている。例えば、2011年3月11日に発生した東日本大震災へ支援の為に、興隆春風祭で250万円の募金が集まった。その内訳は、一般から64万円、興隆春風祭の出演団体から15万円、組合員から148万円、その他の関係団体から22.4万円となっている²⁹。同様に中国の四川大地震の時も募金が行われた。

春節祭を含めて、以上の五つのイベントは基本的に毎年開催されている。春節祭は最も重要なイベントで、次は中秋節、三番目は端午節である。主催は南京町商店街振興組合で、協力団体としては神戸市を中心に、元町商店街や他地域の組織などの参加もある。これまでの各イベントを見ると、春節祭以外のイベントは、まだ発展途上であることがわかる。例えば、中秋節で行っているイベント内容は春節祭とほぼ同じである。中国伝統の節日を守る上で南京町らしいものや南京町に行かなければ見られない固有なものを提供することが重要である。南京町の中秋節だけの特徴となるイベントが認識されることが大切であろう。

また、南京町のランターンフェアは中国伝統の祭りというだけではなく、中国風の雰囲気を実感できる良さがある。このような形で神戸ルミナリエへの側面的支援もできるようになった。このような新型のイベントは神戸華僑と日本人の心が結び付いて初めて生み出されるものであり、南京町の中国文化という特徴が表現されるばかりでなく、日本人と同じく「神戸っ子（神戸で生まれた華僑）」としての役割も果たしているのである。興隆春風祭も同様、義援金を集めるという形で、中国も日本も問わずに災害復興のために被災地へ支援をしている。

第三章 データ分析とWEB戦略

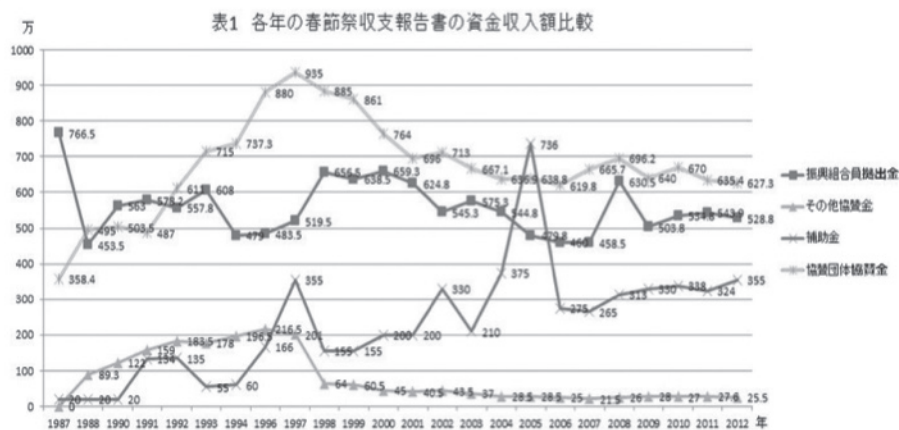
「春節祭」はアイデンティティに特徴付けられた重要な文化遺産という点で地元神戸の人々に認知されている。ここでは、「春節祭」のような各種のイベント行事をうまく進行さ

²⁹ 南京町商店街振興組合『南京町通信』2011年版、9頁。

せることは南京町の発展に大きな影響を与えるということを立証しておきたい。行事の際に、どこから、いかにどの資金を導入したのかをまず分析することとする。ついで、そのデータから、南京町商店街振興組合は周辺地域社会と神戸市など行政当局とどのような関係性を持っているのかを見てみたい。

本節では『南京町通信』に基づき、その中の「春節祭収支報告書」データから、神戸南京町と振興組合と各周辺地域社会の関わりと、各協賛団体の出資金割合を検証したい。

表1は「春節祭収支報告書」から抽出した1987年から2012年までの春節祭収入金額の変遷である。南京町商店街振興組合拠出金、協賛団体協賛金、その他協賛金と補助金から構成されている。この表から見ると、1987年の最初のデータでは、その他協賛金は表示されていない。協賛団体協賛金とその他協賛金が区別されていなかったからである。協賛団体協賛金は358.4万円で、神戸市からの補助金は20万円であった。この年は春節祭を行うために南京町商店街振興組合員が766.5万円の資金を出した。初回の春節祭を成功させるためにお金を集め、個人としての貢献している。初回春節祭の経験から収入の来源は細分され、1988年の春節祭から協賛団体協賛金とその他協賛金、補助金はそれぞれ区別して記録されるようになった。以後、神戸市の補助金や、協賛団体協賛金、その他協賛金からの金額は徐々に増えてきたことがわかる。



出所：各年版「南京町通信」の「春節祭収支報告書」から作成。

協賛団体協賛金は神戸市内の各種日本人企業を示している。その他協賛金は南京町西通りの中の日本人店舗と華僑華人の店舗による協賛金を示している。補助金は神戸市観光課、神戸国際観光協会、神戸港振興協会、兵庫県商店街振興組合連合会などからのものである。協賛団体協賛金、その他協賛金、補助金の増減は年によって変化がある。

最初の春節祭への拠出金約766万円のほとんどが華僑や組合に加入している日本人からの出資であった。以後、南京町振興組合拠出金は毎年平均550万前後になり、最初より減

少している。外部の協力を積極的に入れ、他の協賛金が徐々に増えて、組合員の負担が軽減されたことや、個人の経済的原因と一部人員の変動があったことが考えられる。

協賛団体協賛金は最初の 358.4 万から徐々に増え、1997 年に最高の 935 万円を達成した。その後は減少していくが、平均 700 万円を超える高い金額を維持している。そして、1992 年から組合員の金額を超え、2005 年を除きトップとなった。春節祭への支援が日本企業、日本人団体の方が華僑より多くなったことは、周辺団体が共同して地域の発展や特に春節祭の役割を徐々に重視し始めたことの表われである。

その他の協賛金出資者は最初、中国の伝統的な祭のことをまだ認知してなかったが、翌年から南京町に協賛し、金額も徐々に増加していった。1997 年に最高の 216 万円を達成して以降少しずつ減少している。減少の原因は詳しく分析できないが、例えば企業、店舗の移転や閉店やその他協賛から協賛団体に入った、あるいは団体ではなく個人からの協賛に変わったなどが想像できる。

補助金については、最初の 20 万円が神戸市からの支援で、それ以降徐々に増加した金額は神戸市を含め、新たな別組織からの補助であった。特に 1997 年と 2005 年は顕著に増加している。

全体的に見ると、1997 年に協賛団体協賛金は 935 万円に、組合員拠出金は 519.5 万円に、補助金は 355 万円に、その他協賛金は 201 万円であった。この年、組合員拠出金以外では、各ジャンルともにトップになった。考えられる原因には、1997 年に「南京町」が南京町商店街振興組合の商標として登録され、「春節祭」が神戸市地域無形民俗文化財に指定されたことがある。南京町と春節祭の価値が多くの日本企業、その他諸団体に認識され、協賛が得られたのである。また、2005 年には、補助金が 736 万円となり、はじめて協賛団体の 638.8 万円を超えた。この原因では、2005 年に「西安門」が阪神大震災から 10 年を機に復興のシンボルとして竣工したことが考えられる。補助金団体のうち、「震災 10 周年神戸からの発信」市民企画事業補助金の 200 万円と震災 10 周年記念事業補助金の 200 万円を受領したことは特筆すべきであろう。

以上の分析から明らかになったのは、春節祭の運営は組合員が主となり、日本人企業や日本団体や神戸市等の組織からの協賛資金に依存していることである。協賛団体数は南京町商店街振興組合加盟店数より少ないにもかかわらず資金を多く出している。南京町は周辺地域との関わりが深く、神戸地域の中では代表的な観光地として注目され、神戸市の一部として特別な位置を有しているからであろう。南京町への資金援助は南京町の振興と発展の為だけではなく、神戸市発展のためでもある。この表から、神戸地域発展のために、日本人と華僑華人が一緒に努力している姿が見て取れる。

2013 年現在の最新の春節祭収支報告書³⁰から見ると、補助金団体とその補助金は神戸市産業振興局観光コンベンション部観光コンベンション課から 100 万円、阪神・淡路復興基

³⁰ 南京町商店街振興組合から提供された内部資料を参考した。

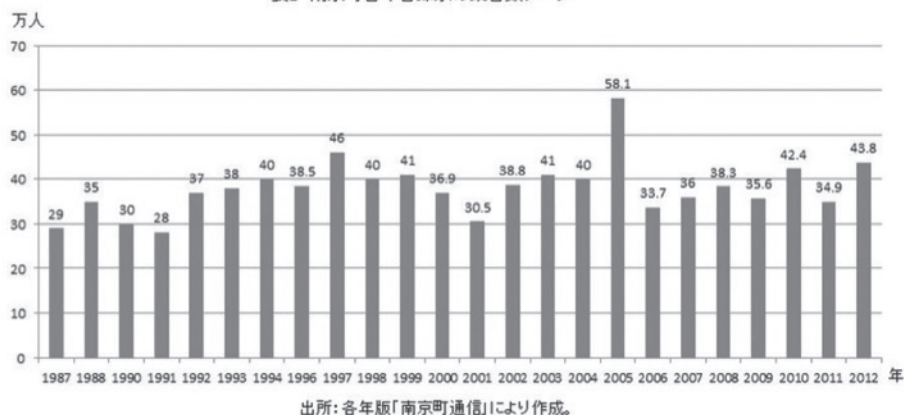
金被災商店街賑わい支援事業から 208.2 万円、兵庫県地域活性化集客支援事業から 50 万円、神戸市民俗芸能伝承事業から 5 万円であった。協賛企業（団体）から 513.1 万円で、周辺地域団体から 140 万円。組合員からは 518.4 万円で、非組合員からは 23.6 万円であった。以前の収支報告書と比べ、少しずつ変化があり、以前よりさらに細分化、明確化されている。さらに収入のなかで、「前年繰越金」と各方面の「売上」収入も入り、全体的な総収入が見やすくなり、収入と支出の比較も赤字や黒字で表示され、その原因も『南京町通信』の中で説明されている。春節祭だけではなく、南京町商店街振興組合の中ではイベントの運営や管理に関して、詳細な数値で表示されるという透明性が確保されている。組織としての成長を認めることができる。

次に各団体の協賛金を使用し、春節祭イベントを実行した結果、どれほどの客が南京町に来ていたかを、表 2 の春節祭集客数データで分析しておきたい。

表 2 を見ると、1987 年の最初の春節祭は約 29 万人、以降増加と減少を繰り返したが、15 年を経て毎年平均約 40 万人を集客することができるようになった。毎年変動する旧暦カレンダーに影響され、南京町の春節祭の期間は固定できないし、協賛金が不足して実行期間が縮減される場合もあった。そのため集客力には変動が見られる。一方、表 1 にも示した通り、1997 年と 2005 は歴代春節祭中で多くの協賛金が集まったため、充実したイベントが行われたことから、より多くの来客があったものと考えられる。

また、表 1、2 にも明らかなように 1989 年と 1995 年には春節祭が開催されなかった。1989 年には昭和天皇の崩御、1995 年には阪神・淡路大震災が起ったため中止されたことがその理由である。

表2 南京町各年春節祭の集客数データ



南京町春節祭は中国人地域社会と周辺地域社会を結び付ける道具としての役割が大きい。特色がある地域の商店街としての性格も強く作用している。それは、神戸市や各周辺団体と地域の連携によって具現化されている。春節祭は南京町自身の発展のために行うイベントにとどまらず、神戸市の発展と活性化をもたらす重要な行事である。南京町の中の日

「共生」だけではなく、日本社会の中で中国人や中国系全体が日本人とともに発展し、日本社会の一員として経済的に共同発展していくための理想的なモデルを提供していると思えてならない。

また、神戸南京町に注目するならば、南京町公式ホームページや南京町にきた来客からの意見や提案などを避けて通ることができない。80～90年代に入ると、電子メールやインターネットが徐々に発達して、パソコンを使用して情報を手に入れやすくなった。南京町商店街振興組合員もチラシで宣伝するより、インターネットを利用して販売や集客ができると考え、パソコン上の仕事を専門職として行っている玉城公一³¹に協力を仰ぎ、インターネットでの集客のための企画や通信販売の手ほどきを受けた。こうして、南京町公式ホームページは1996年8月に開設され、誰でもアクセスさえすれば、必要な情報を確認できるようになった。それから、2005年9月に公式ホームページのアドレスを統一し、各店舗で自ら情報を更新できるよう、店舗情報のシステムを更新した。さらに同年の12月には公式ホームページの携帯サイトも開設した。次に、2011年4月に南京町公式 Facebook ページを開設し、同年の12月には、公式サイトをリニューアルにして、各店の Facebook ページや Twitter など、SNS（メール）と連動可能にし、モバイルサイト（小型パソコンを向け）の他、新たにスマートフォン向けの公式サイトもオープンした³²。

2013年現在までに、南京町インターネットからの発信は17年の歳月を経た。公式ホームページを作る際には、まず南京町商店街各店舗の情報を収集しなければならない。1996年に設立する時の担当者は欧政彦³³であった。彼は各店舗へ行って、南京町のホームページの作成について商店主たちに説明をしたが、様々な声があったという。今のままでいいと思う人もいるし、はっきり反対する人もいた。彼はホームページの重要性の説明や資料の収集に工夫を加えたという。その当時、一部の老華僑や組合員には新しいものに対する理解がなく「古いしきたりに固執する」者もいた。欧政彦は大多数の組合員の協力を得て、困難を克服し、南京町ホームページを作ることに専念し、最後にみんなの力で作り上げたという³⁴。

その後も、彼は主としてホームページの運営と管理を担当し、各店舗の情報収集と更新を行っている。そして収集した情報やネット上で見せたいものはまとめて関連会社に届け、デザインの作成を依頼している。今もこのような流れで行っているという³⁵。

ホームページ上の「南京町大全」に関する内容は基本的に南京町商店街振興組合内部の

³¹ 玉城公一「『神戸南京町』を Web で再建、商店街の活性化を請け負う」、『日経ネットビジネス』、1999年7月号、130～133頁。

³² 南京町公式ホームページ「南京町歴史」

（http://www.nankinmachi.or.jp/about/history/h13_now.html）を参考にした。2013年12月12日。

³³ 南京町「大同行」の社長、南京町商店街振興組合員、広報部長である。

³⁴ 2013年5月21日、大同行欧政彦に対するインタビューより。

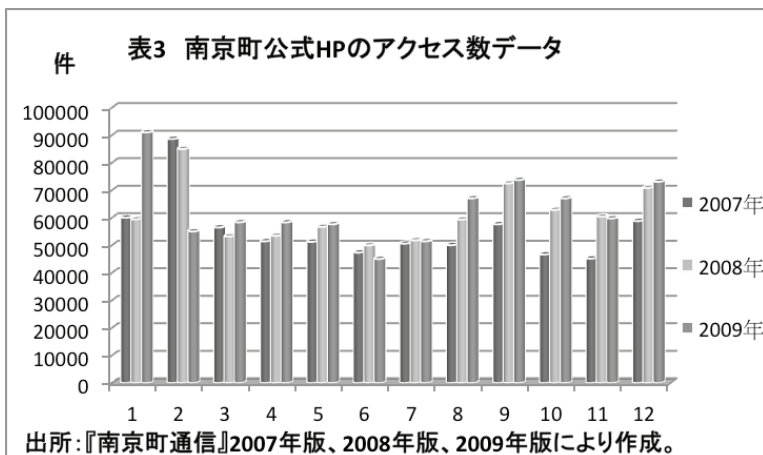
³⁵ 2013年12月、南京町商店街振興組合事務局員平山氏からの聞き取り調査より。

史料や昔の『南京町通信』を参考にして作成したものである。具体的には、「南京町とは」、「南京町の歴史」、「年中行事」、「南京町の龍舞、獅子舞」、「分煙」、「南京町商標登録」などに分かれていて、それぞれをクリックすると詳細を見ることができる。また、「店を探す」という部分も、南京町案内図の内容と同一であり、料理、軽食、食材などを探しやすいように分類されている。さらに興味があった部分をクリックすると、各店舗のホームページに入り、料理だけではなく、店舗の特徴や南京町で創業した歴史などもいつでも簡単に手に入れられるようになっている。雑貨や点心などの商品を購入する時にも、各店舗の店主と直接問い合わせることができるようになったのは 2005 年からである。2005 年以前にはホームページの管理人から各店舗へ伝える不便であり、インターネットを利用して買物をする人も少なかった。

今も直接南京町に来て中国風の雰囲気を感じながら買い物する人のほうがはるかに多い。全体的に見ると、ネットの利用は「最新情報（イベントの内容と日にちの確認）」や「交通アクセス」、「南京町地図」と「特典情報」（美味しい店の紹介や割引券の利用など）が中心である。南京町商店街事務局への電話の問い合わせ場合もほとんどが以上の内容である。

また、多くの研究者は南京町の来客に対してアンケート調査やインタビュー訪問を行っている。南京町商店街振興組合員たちもホームページを利用して、ネット上の訪問者にアンケートの協力をお願いしていた。目的は、一ヶ月に一回行っている振興組合員会議で組合員たちに報告するためである。これをみると、インターネットの利用者数や年齢層、目的がわかる。また、南京町への意見、メッセージなどのから南京町全体の状況やその改善すべき点を捉えることができ、さらにその解決策を考えることができるようになった。

下の表 3 は、月別の南京町公式ホームページ利用者アクセス数から 3 年間のデータを取り上げたものある。この表を見ると、一年の中で、2 月のアクセスが最高である。次に 9 月と 12 月がほぼ同じで、三番目は 8 月と 10 月がほぼ同じである。平均アクセス数でみる



と一年の後半は前半よりやや多い。2 月は春節祭で、9 月は中秋祭、12 月は年末でランタンフェアのような行事を行う月のアクセスが多く、その時に南京町の

イベントへ注目している客が多いことがわかる。特に 2009 年 1 月のアクセスが 9 万件を超

え、トップになった原因は、2009年の春節祭が1月26日から始まったので1月から2月前半までのアクセス数が多かったからである。データから見ると、1月と2月の差が大きい年がある。その原因は春節祭の開催日が毎年一定ではなく変動することによる。そして、8月はお盆休みに入ることや南京町中秋節開催日の変動により、9月にかけて増加する傾向にある。さらに全体的に見ると、毎年のアクセス数が少しずつ増加している。イベントの実行により南京町への関心を持つ者が増加していくことが想像できる。

また、南京町公式ホームページでは利用者からのメッセージも月別ごとに集計されている。以下は、『南京町通信』により2010年1月のメッセージの一部である。例えば、「今年こそはと思っていましたが、ホントに今年こそは神戸南京町春節を見にいけそうです。ついでには今年の春節祭が行われる日程、そして龍が舞う時間帯を教えてください。ぜひお願いします」、「ブログで春節祭へリンクをすることは可能でしょうか、以下のページにリンクしたいと思っていますが、ルールがありましたらお知らせください」、「2月15日に南京町へ遊びに行きます。赤ちゃん連れのため、授乳室やオムツ替える場所がありますか」、「小型犬を連れて行こうと考えているのですが、同伴okのお店は南京町内に有りますか」、「南京町大好きで、今年も行きます」、「お世話になります、中華街の散策mapを100部ほど送付お願いいたします」、「他府県でも割引可能な障害者の駐車場がありますか」などの様々なメッセージがあった。ホームページを利用して南京町情報を確認したり疑問を投げかけたり、感想の書き込みなどパソコンで家から簡単にアクセスできるようになった。そしてこのようなメッセージは利用者保護の原則で、名前なども一切公開されず、南京町商店街振興組合の内部資料として管理されている。

2005年2月のアンケートに答えた者の集計結果により、南京町に一番関心が高い地域は兵庫17人、次は大阪11人、三番目は京都6人である。他地域では一人、二人程度で少ないが、全体的に見ると、日本全国に南京町に注目している人がいることが分かる。他地域の人たちにとっては、南京町は地理的に遠く、南京町以外の近隣中華街に注目する人が当然多いと考えられる。

集計結果による分析は様々である。例えば、男女別（女性が多い）、業種別（会社員が多い）、年代別（30、40代が多い）などがある³⁶。

一方、各種イベント活動の増加や南京町商店街ネットワークの運営と管理などの細かい仕事が多いという原因で（注35 平山氏より）、ネットからの統計は2005年に「アクセス」と「メッセージ」だけ残して、他の全部を中断した。さらに、この二種の統計も2011年には中断した。

その他、新時代に応じてインターネットの利用だけではなく、携帯でもアクセスできるようになり、自由に発言もできるようになった。主には、南京町の最新情報の公開、南京

³⁶ 南京町商店街振興組合『南京町通信』2005年版、2月のアンケート集計結果を参考にした。

町の面白い事や美味しい料理の紹介なコンテンツである。さらに、南京町公式 Facebook から情報、写真の無料転載やダウンロードが誰にも自由にできるようになった。公式フェイスブックは広報部長欧政彦が主に運営と管理、情報の更新をしている。

その他、南京町に関する新聞、テレビ、インターネット以外の重要な宣伝媒体は各種チラシとパンフレットである。南京町商店街振興組合から『南京町ガイドブック』と「南京町案内図」が基本的に 10 万部ぐらい発行され、これが無くなったらまた同じものを作っている³⁷。毎年の更新はしていない。ガイドブックは南京町の歴史、イベント、中国伝統知識を紹介し、神戸華僑歴史博物館、神戸の関帝廟、神戸舞子の孫文記念館への案内も記載されている。写真を添えたわかりやすい案内書である。南京町の正式な案内書である。また、「南京町案内図」は振興組合員の店舗の位置を表示し、店舗の場所が変動したら新しい案内図を作ることにしている。

さらに、各イベントを紹介するチラシは毎年更新し、春節祭や中秋祭のような大きい伝統行事のチラシは 10 万部発行している。このようなものは基本的に南京町各門の入り口や、各店内に置いているし、さらに三宮、元町商店街や大丸、近くの神戸華僑歴史博物館や関帝廟、孫文記念館内にも置いている。周辺地域との連携が確認できる。

終わりに

神戸南京町は最初の市場から現在のように観光地に変身するまで、発展、衰退、再興を繰り返した。近年ようやく南京町商店街のまちづくりの努力に支えられて、中国風雰囲気を持つ繁栄したまちの姿になっている。この繁栄は、「南京町商店街振興組合」員の共同協力の賜物であることが明らかになった。華僑と日本人が相互に依存し、相互扶助しながらも、相互に競争していることが、神戸南京町の更なる発展の原動力となっている。

華僑と日本人の両者がともにこのまちを愛している様子が見えてくる。そして、情報が国際化し、価値観も多様化へと進んでいる社会の中で、南京町も伝統を継承しつつも、新しいネット時代の到来に対応して、新しい手段で宣伝するようになった。南京町はその伝統的特徴を維持しながら中国的伝統の創出にも余念がない。南京町の華僑もいまや「外国人」ではなく、現地人もしくは主人公としての立場からイベント活動を行っている。南京町は中日の経済、文化交流の場としての役割も果たしている。

南京町には華僑の力がみなぎっている。しかしながら、県や市などの公的機関やNPO、周辺地域の日本人企業や日本人団体の支援なしではここまでの発展はありえなかった。神戸における「共生」社会の成功例として発信し続けていることは高く評価できる。もちろん、現在の南京町には様々な問題もある。例えば、新華僑と老華僑の摩擦の存在や、オリジナル商品の開発、店員サービスの向上、イベント資金の不足の問題などが顕著である。南京町を更に発展させるためには、このような問題を解決しなければならない。

³⁷ 「南京町の魅力満載—公式ガイド、10 万部配布」、『神戸新聞』2010 年 1 月 27 日。

参考文献

- 王維 2001『素顔の中華街』洋泉社
- 王維 2001『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ』風響社
- 開港 30 年記念会編 1974『神戸開港三十年史』（下巻）願房
- 可児弘明、斯波義信、游仲勲 2002『華僑・華人事典』弘文堂
- 鴻山俊雄 1979『神戸大阪の華僑—在日華僑百年史』華僑問題研究所
- 神戸華僑華人研究会 2004『神戸と華僑（この 150 年の歩み）』のじぎく文庫
- 第三集行政 1965『神戸市史』神戸市文書館
- 譚璐美、劉傑 2008『老華僑 新華僑—変容する日本の中国人社会』文藝春秋
- 中華会館編 2000『落地生根—神戸華僑と神戸中華会館の百年』研文出版
- 張玉玲 2008『華僑文化の創出とアイデンティティ』ユニテ
- 『兵庫県大百科事典』（下巻）1983 神戸新聞出版センター
- 莫邦富 2000『新華僑』中公文庫
- 山下清海 2005『華人社会がわかる本』明石書店
- 浅野真由、百武由加里 2007「外国人エスニシティ：神戸南京町のコミュニティに関する調査（2005 年度社会調査演習報告）」神戸大学社会研究会
- 池田和子 2002「横浜中華街と神戸南京町：東西チャイナタウン比較への試み」『地域と社会』第五号
- 大橋健一 2000「神戸南京町の再構築と観光」『立教大学観光学部紀要』第 2 号
- 京都精華大学文学部 1993「神戸の南京町—歴史と発展の様子」『国内フィールドワーク報告書第 1 集』第 1、2 章
- 高橋正明、于亜「神戸南京町の形成と変容」『大手前女子大学論集』1996 年、第 30 号
- 玉城公一 1999「「神戸南京町」を Web で再建、商店街の活性化を請け負う」、『日経ネットビジネス』
- 張玉玲 2007「「観光地「中華街」の形成と発展からみる日本人と華僑が試みた「共生」」『愛知淑徳大学論集』第 7 号
- 南京町公式ホームページ <http://www.nankinmachi.or.jp/>
- 南京町商店街振興組合『南京町通信』各年版、「南京町公式ガイドブック」2010 年

（神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程）